

## 山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生の動向（第1報）

### 卒業生の実態と看護技術演習に対する評価

遠藤 恵子・佐藤 幸子・青木 実枝  
遠藤 芳子・後藤 順子

## The trend of the alumni of Yamagata School of Health Science (The 1st Report)

An investigation into the actual state of the alumni of Yamagata School of Health Science, Department of Nursing and evaluate their content of practical training seminar

Keiko ENDO, Yukiko SATO, Mie AOKI, Yoshiko ENDO, Junko GOTO

#### Abstract :

**Background :** The fundamentals of nursing education are needed to improve nursing students' practical ability.

**Purpose :** To investigate the actual state of the students who have graduated from the Yamagata School of Health Science, Department of Nursing and evaluate the level of seminars on practical training taught while they were students.

**Participants :** 238 students who graduated from the Yamagata School of Health Science, Department of Nursing

**Method :** The questionnaires were sent to the subjects and returned by mail. Enquiries were made about courses taken after graduation, their employment situation, their desired qualifications to be taken in the future and their personal evaluation of YSHS' seminars and practical training.

**Results :** 103 alumni returned the questionnaires. Some alumni attained public health nurse, nurse-midwife, school nurse, and bachelor qualifications. The alumni work as hospital nurses, public health nurses, nurse-midwives and school nurses. 51 alumni hope to get qualifications to become a public health nurse, nurse-midwife, school nurse and bachelor qualifications specializing in clinical nursing, in the future. Some alumni expressed satisfaction towards their practical training while others felt that some training was inadequate and opportunities for real practical training was limited.

**Conclusion :** We ought to reconsider and revise the subjects and contents of our seminars on practical training to improve the high quality of nursing education.

**Key words :** nursing education, practical training seminar, alumni

### はじめに

平成14年3月看護学教育の在り方に関する検討会は、大学における看護実践能力育成の充実に向

けて、各大学が個性ある大学教育の発展することと、看護職の最低限身に付けておくべき技術教育のために、各大学が到達目標を明確にすることを強く求めた<sup>1)</sup>。看護系大学が全国100校を超え、

山形県内に看護系大学が2校ある状況の中，本学には，本学の個性ある大学教育の特色を出し，発展することが期待されている。

近年，医療技術の進歩や人権意識の高まり，さらに静脈注射が診療の補助業務として位置づけられるなど看護の環境は変化し，科学的かつ高度医療に対応できる技術と応用力が必要とされている。

それに伴い，看護基礎教育終了時，つまり大学卒業時に，一定の実践能力を身に付けることが強く求められている。看護実践能力は，専門知識と幅広い教養，倫理的配慮を基盤にしながら，看護実践のコアとなる技術学習項目や内容を明確にするものである。各看護基礎教育機関は，看護実践能力の育成のための教育，つまり，卒業後実践に生かせる技術学習項目や内容を充分検討する必要がある。

看護基礎教育では，講義，演習，実習が教育課程に配置されている。看護技術演習は，看護実践に必要な技術習得を目的に学内の実習室において講義以外の方法により実施する授業<sup>2)</sup>であり，看護技術の理論の確認や基本的技術を習得させる<sup>3)</sup>ことを目的に教育課程に配置されている。看護技術演習は，看護基礎教育における実践能力の育成に重要な役割をもつ。

平成9年4月に開学した山形県立保健医療短期大学（以下，短期大学）は，平成12年3月，山形県立保健医療大学（以下，本学）に移行した。それに伴い平成12年度以降学生の募集を停止し，平成14年3月に短期大学看護学科最後の卒業生を送り出した。4年制大学への移行に伴い，助産師・保健師・看護師の統合カリキュラムとなり，新しい教育目標・教育課程となった。一方，本学の教育課程は，短期大学と同様，保健師助産師看護師養成所指定規則や国家試験出題基準をふまえている。本学の開設科目や講義内容は，短期大学とは異なっているが，実践に必要な看護基本技術を習得する看護技術演習の項目は，短期大学で教育していたものと共通するところが多い。

そこで，今後の教育における実践能力育成のための具体的な技術教育を検討するため，卒業し様々な職場で看護職として働き，看護技術を臨床の場で実践している短期大学卒業生による，在学中に学習した学内の看護技術演習の評価が有効であると考えた。

## 研究目的

- 1．短期大学看護学科の卒業生の動向を明らかにする。
- 2．短期大学卒業生による，看護技術演習項目の評価を明らかにする。
- 3．本学における，実践能力を高めるための演習を考察する。

## 研究方法

対象は本学の前身である短期大学の平成12～14年度の卒業生で，卒業後逝去した2人を除いた238人とした。

調査内容は卒業後の進路，現在の勤務状況や今後得たい資格，看護技術の教育内容の評価などであった。

看護技術演習の教育内容の評価については，短期大学卒業生の在学中の教育課程に基づき，基礎看護28項目，成人看護6項目，在宅看護4項目，小児看護4項目，母性看護学6項目について，学内で演習した技術項目それぞれについて「充分役立っている」，「内容が不足している」，「方法が実践とかけ離れている」，「実践する機会がない」，および「その他」の中から選択し，「内容が不足している」，「方法が実践とかけ離れている」場合はその内容を記述してもらった。

調査方法は，自作の質問紙を用い，自記式とした。プレテスト後，卒業時の実家の住所に依頼文書，調査用紙，返信用封筒を郵送し，回答後，郵送にて回収した。

倫理的配慮として，調査の目的とプライバシーの保護および調査を拒否できることを明記した調査依頼書を同封し，調査は無記名で，回答後の調査用紙は封書で返送してもらった。

分析は，記述統計とした。

## 結 果

調査票回収数は103で回収率は43.3%であった。対象の平均年齢は23.3 ± 1.3歳で，男性3人，女性99人，無回答1人であった。卒業年は，平成12年3月36人，13年3月31人，14年3月35人であった。出身地は，山形県内が75人と7割以上で，その他北は北海道から南は静岡県であった（表1）。

1. 短期大学卒業生の動向

卒業後の進路は進学 25 人 (24.3%)，就職 72 人 (69.9%)，その他 6 人だった (表 2)。進学先は，保健師の養成学校 11 人がもっとも多かった (表 3)。これまでに取得した資格は，保健師 8 人，養護教諭 7 人などであった (表 4)。短期大学卒業後の就職先は，病院が 65 人でもっとも多かった (表 5)。就職後これまでに就職先を変更した者は 9 人であった (表 6)。現在勤務している施設の設置主体は国公立が 55 人であった (表 7)。現在従事している者 84 人の職種は，看護師 74 人，保健師 4 人，助産師 2 人，養護教諭 1 人，その他 3 人であった (表 8)。現在の勤務地は，山形県内が 56 人の他，

宮城県 11 人，東京都 3 人の他，北海道から京都府までとなっていた (表 9)。山形県出身で，就職先も県内のもものは，50 人であった。県外出身で山形県内に就職した者は 6 人であった。これまで従事経験のある領域を複数回答で聞いたところ，成人看護領域 60 人，老年 35 人，精神 14 人，地域 5 人，小児 14 人，母性 8 人であった (表 10)。今後取得したい資格を複数回答で聞いたところ，学士 20 人，保健師 23 人，養護教諭 10 人，考えていないが 50 人であった (表 11)。今後取得したい資格の有無を卒業年度別にみると，今後取得したい資格「有り」は，平成 12 年度 12 人，13 年度 21 人，14 年度 18 人であった (表 12)。

表 1 対象の属性 N = 103

年齢 (平均 ± 標準偏差)	23.3 ± 1.3 歳
性別	男性 3 女性 99 無回答 1
卒業年	平成 12 年 3 月 36 平成 13 年 3 月 31 平成 14 年 3 月 35 無回答 1
	専攻科修了平成 13 年 3 月 (再掲) 8 専攻科修了平成 14 年 3 月 (再掲) 2
出身地	山形県 75 北海道 6 青森県 1 岩手県 3 秋田県 8 宮城県 5 福島県 2 その他 3

表 2 卒業後の進路 N=103

進学	25
就職	72
その他	6

表 3 進学者の進学先 N=24

保健師課程	11
助産師課程	4
養護教諭課程	3
看護大学編入	5
その他	1

表 4 短大卒業後取得した資格 複数回答

保健師	8
助産師	3
養護教諭	7
学士	1

表 5 卒業後の就職先 N=72

病院	65
診療所	1
県・市町村	4
その他	2

表 6 卒業後就職先の変更 N=84

あり	9
なし	74
無回答	1

表 7 現在の勤務先の設置主体 N=84

国公立	55
私立	29

表 8 現在従事している職種 N=84

看護師	74
保健師	4
助産師	2
養護教諭	1
その他	3

表 9 現在の勤務地 N = 84

山形県	56
北海道	1
岩手県	1
宮城県	11
秋田県	2
東京都	3
その他	11

表 10 これまで経験のある領域 複数回答

成人看護領域	60
老人看護領域	35
精神看護領域	14
小児看護領域	14
母性看護領域	8

表 11 今後取得したい資格

なし	50
あり (複数回答)	保健師 23 助産師 3 養護教諭 10 学士 20 修士 7 博士 2 その他 (ケアマネージャー、専門看護師等)

表 12 卒業年別今後取得したい資格の有無

		なし	あり	無回答
平成 12 年 3 月	N=36	24	12	0
平成 13 年 3 月	N=31	10	21	0
平成 14 年 3 月	N=35	15	18	2

2. 看護技術演習に対する評価

1) 基礎看護学

演習項目 28 項目に対する評価は、図 1 に示すとおりである。ベッドメイキング、シーツ交換、寝衣交換、安楽な体位、体位変換、移動・移送、食事介助、排泄の介助、清拭、洗髪、足浴、口腔ケア、バイタルサイン測定、無菌操作、ガウンテクニック、手洗い法、経口与薬、注射、吸入、導尿、浣腸、採血、電法の 23 項目で、半数以上が「充分役立っている」と答えた。特にベッドメイキング、シーツ交換、寝衣交換、安楽な体位、体位変換、移動・移送、清拭、足浴、バイタルサイン測定、無菌操作、手洗い法、経口与薬、電法の 13 項目では、7 割以上の方が「充分役立っている」と答えた。逆に「内容として不足している」と答えた人が多かった項目は、点滴、吸引、経管栄養法、注射、抑制、排泄の介助、食事介助、口腔ケアであった。「方法が実践とかけ離れている」と答えた人が多かった項目は、抑制、洗髪であった。「実践する

機会がない」と答えた人が多かった項目は、包帯法、ガウンテクニック、抑制、経管栄養法、洗髪、口腔ケア、経口与薬であった。経管栄養法、注射、点滴、吸引、吸入、導尿、採血の項目では、「充分役立っている」がいる一方、「内容が不足している」も多く、意見が分かれていた。

自由記載に書かれた意見では、点滴について「留置針の取り扱いや輸液ポンプの使い方などが必要である」や「経験回数が足りないのでよく理解できなかった」などがあった。注射も同様に「経験回数の不足」の意見があった。吸引や経管栄養については「実際に経験したかった」という意見があった。抑制では精神科や老人のケアにおいて、方法の違いを指摘するものが多かった。

2) 成人看護学

演習項目 6 項目に対する評価は、図 2 に示すとおりである。血糖測定、剃毛、経皮的酸素濃度計の使用法の 3 項目では、半数以上が「充分役立っている」と答えた。「内容として不足している」と答えた人が多かった項目は、肺音聴取であった。心電図の測定、胃管挿入、剃毛は、「実践する機会がない」と答えた人が多かった。肺音聴取、血糖測定は、「充分役立っている」と答えた人がいる一方、「内容が不足している」と答えた人も多く、意見が分かれていた。

自由記載に書かれた意見では、肺音聴取について「聴取部位、肺音の種類、エアの入りの程度について具体的に知りたかった」などがあった。

これを成人看護領域で従事経験があると答えた 60 人についてみると(図 3)、血糖測定、剃毛、経皮的酸素濃度測定は、半数以上が「充分役立っている」とした。肺音聴取、心電図の測定は「内容として不足している」と答えた人が多かった。また、心電図の測定と胃管挿入は、「実践する機会がない」と答えた人が多かった。

3) 在宅看護学

演習項目 4 項目に対する評価は、図 4 に示すとおりである。老人の疑似体験では「充分役立っている」と約半数が答えた。その他の家庭訪問、床上の洗髪、簡易浴槽による入浴は、「実践する機会がない」が多かった。

これを、地域看護学領域で従事経験があると答えた 5 人についてみると(図 5)、家庭訪問、老人の疑似体験、床上での洗髪でそれぞれ 1 人ずつ

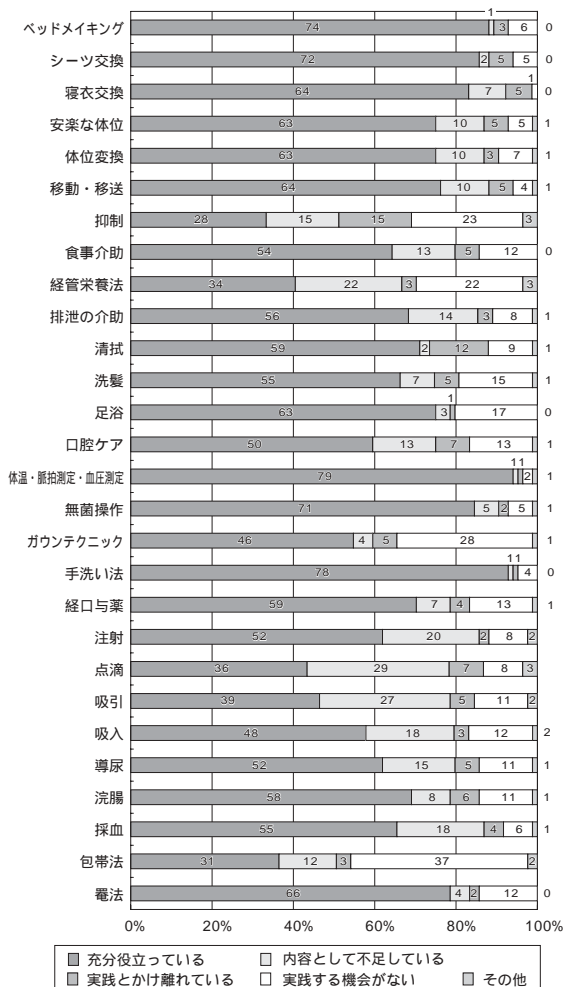


図 1 基礎看護演習に対する評価

つ「充分役立っている」他は，すべて「実践する機会がない」であった。

#### 4) 小児看護学

演習項目4項目に対する評価は，図6に示すとおりである。腰痛穿刺の介助では，約2割が「充分役立っている」と答えた。

これを，小児看護領域で従事経験があると答えた14人についてみると(図7)，骨髄穿刺介助，腰痛穿刺介助，呼吸器装着や点滴時の沐浴，乳児計測のいずれも約4割が「充分役立っている」であった一方，それらすべての項目で，約半数が「実践する機会がない」としていた。骨髄穿刺の介

助，腰痛穿刺の介助，呼吸器装着や点滴時の沐浴では，「内容に不足している」と答えた者もいた。

#### 5) 母性看護学

演習項目6項目に対する評価は，図8に示すとおりである。新生児の沐浴，新生児のバイタルサインの測定では，約2割が「充分役立っている」と答えた。

これを，母性看護領域で従事経験があると答えた8人についてみると(図9)，新生児の沐浴，新生児のバイタルサインの測定，妊婦の腹部の観察と計測，産褥期の子宮復古の観察で，約8割が「充分役立っている」とした。乳房マッサージでは，

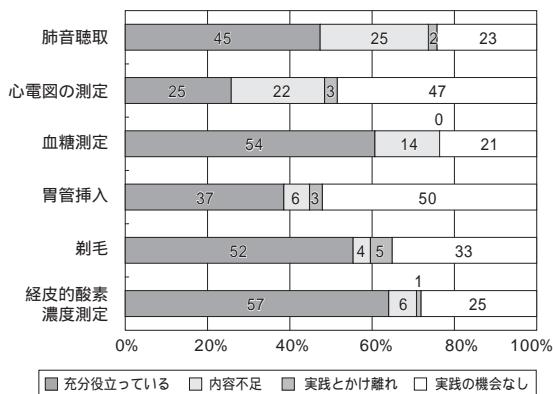


図2 成人看護演習の評価

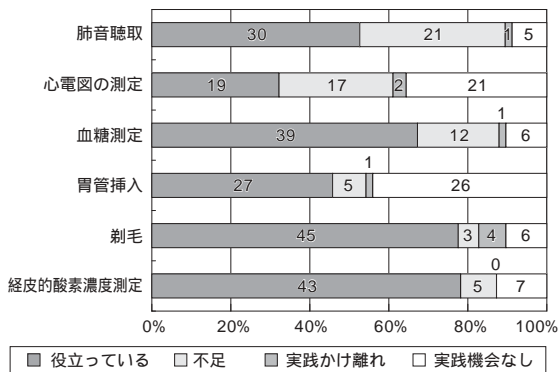


図3 成人看護領域経験者の成人評価 N=60

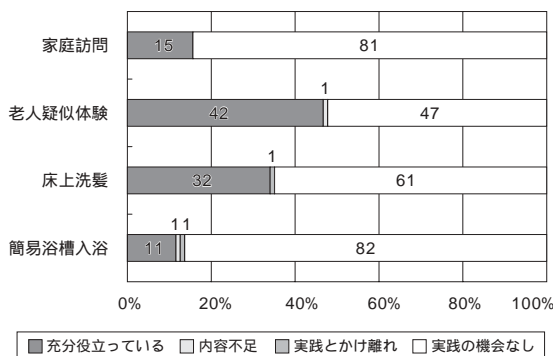


図4 在宅看護演習の表

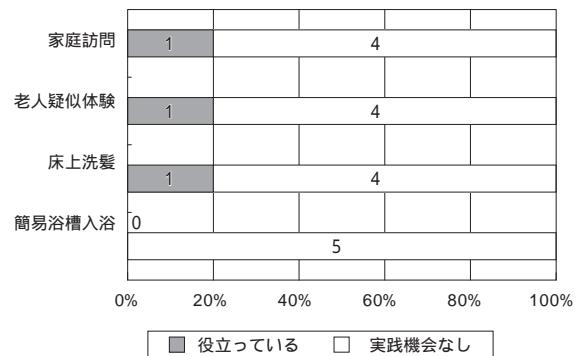


図5 地域看護領域経験者の在宅演習評価 N=5

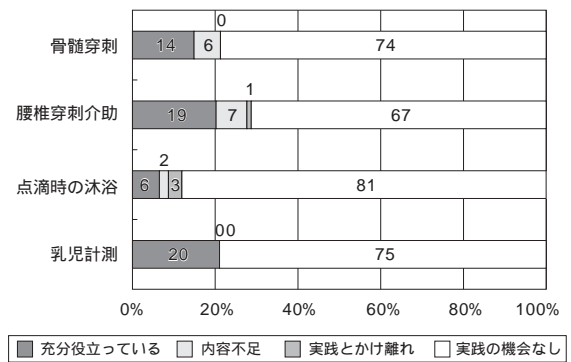


図6 小児看護演習の評価

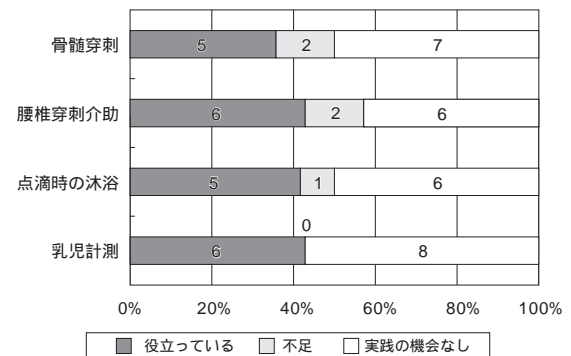


図7 小児看護領域経験者の小児慣習評価 N=14

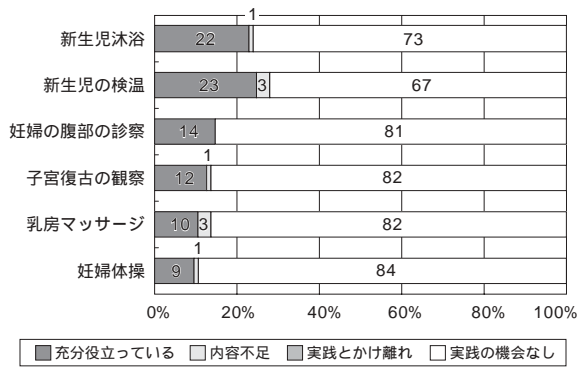


図8 母性看護演習の評価

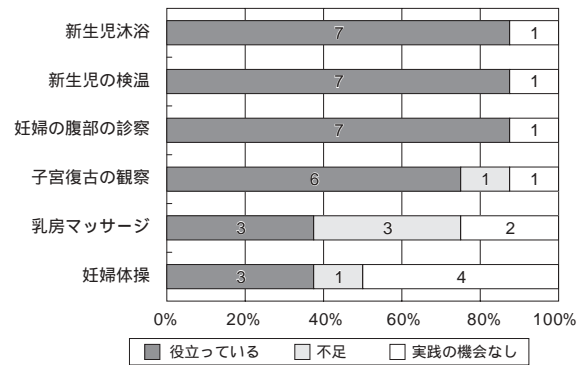


図9 母性看護領域経験者の母性演習評価 N=8

「内容に不足している」も多く、妊婦体操は「実践する機会がない」が多かった。

#### 6) 全体に対する意見

注射や点滴に関するものの他、救急時の対応、死後の処置、輸液ポンプやシリンジポンプのなど医療機器の使用方法を具体的に演習したかったという意見が多かった。

### 考 察

#### 1. 卒業生の実態

今回、短期大学卒業生全員を対象として調査を実施したが、回収率が43.3%と低かった。これは郵送法であることと、現住所が不明確な人もいるため、帰省先に質問紙を送ったことに起因すると考えられた。

短期大学卒業生の約4分の1が卒業後進学を希望し、半数が今後何らかの資格を取りたいと考えていた。これは、さらに自分の職業に対する専門性を高めようとする前向きな姿勢と考えられる。また、看護系大学の増加に伴い平成14年4月の看護師3年課程1学年定員における大学の1学年の定員の割合は20%を超えている<sup>4)</sup>。短期大学卒業生も何らかの資格を求める必要性に迫られていると推測する。本学でも、短期大学卒業生の卒業教育の場として、編入制度や短期大学卒業の大学院入学制度等、さらに学ぶ意欲の強い短期大学卒業生に対する受け入れを今後図る必要がある。

平成12年度卒業生に比べ、13年度卒業生、14年度卒業生に進学希望が多かった。13年度、14年度卒業生は、短期大学と4年制である本学と並行した教育の中で在学していた。同じ学内に4年制大学があることが刺激となり、進学希望が多かったと考えられる。近年、看護系大学院が多く開設

され、また認定看護師や専門看護師の資格をとる看護職も多くなっている<sup>5)</sup>。本学でも、看護職としての専門性を追求する道があるという具体的な情報を短期大学卒業生や現在の在學生に提供することが必要と考える。

具体的な取得したい資格や進学先では、保健師を希望する人が多かった。保健師の資格取得の傾向が強いのは、他の短期大学卒業生の動向と同様の結果であった<sup>6)7)</sup>。

県外出身6人が県内に就職したものの、県内出身者の25人は県外に就職した。このことから短期大学卒業生の県内定着率は高いとはいえない。平成14年度末現在、山形県の看護職員の需給状況はまだ充足されていない<sup>8)</sup>。県立の看護基礎教育機関として、県内の保健医療福祉施設との連携を密にしながら、学生に対し、県内定着率を高めるような就職指導が必要と考える。

#### 2. 看護技術演習の評価

基礎看護学演習では、ベッドメイキング、シーツ交換、寝衣交換、安楽な体位、体位変換、移動・移送、食事介助、排泄の介助、清拭、洗髪、足浴、口腔ケア、バイタルサイン測定、無菌操作、ガウンテクニック、手洗い法、経口与薬、注射、吸入、導尿、浣腸、採血、電法の23項目で、成人看護演習では、剃毛や血糖検査、経皮的酸素濃度計による測定の3項目で、半数以上が「充分役立っている」と評価した。基礎看護学演習で実施している演習項目は、看護を実施する基礎となる基本的な技術を取り上げている。また、本調査の対象の多くが病院勤務であり、成人や老年看護を実践しているものが多数であった。この結果から、基礎看護学や成人看護学で演習に取り上げている項目は、

卒業後、看護を実践するのに、妥当な項目であったと考えられる。

看護技術演習項目のうち「内容的に不足している」と返答のあった項目は、点滴、吸引、経管栄養、注射、肺音聴取、心電図などであり、診療の補助に関するものや、医療機器の取り扱いに関するものが多かった。静脈注射が診療の補助業務として位置づけられ、実践に適用できるレベルの教育が必要となっている。しかし、身体に侵襲を加える看護技術は、現実的には、学内の看護技術演習でも施設における実習でも実施しにくい状況にある。注射や吸引等、学内の演習や実習でさえ実際に行うことが困難な項目については、モデルの整備等も含めて、看護基礎教育における教育方法を検討する必要がある。また、医療機器などの取り扱い技術について、学内で備えられる機器や予算は限られているため、学内で学生が経験したり学習できる項目には限界がある。学内で講義や演習で学習するものと、施設における実習で学習するものを明確にする必要があると考える。

方法が「実践とかけ離れている」が多かったのは、抑制であった。特に精神領域や老人のケアにおいてこれらの意見が多かった。抑制は、高齢者ケアにおいて身体拘束廃止が強く唱えられている<sup>9)</sup>。しかし、看護技術に関する書籍には抑制が取り上げられ<sup>10),11)</sup>、現実には、対象の特性によって使用されている場合も多い。抑制を実施する対象や場面によって、必要性の有無、また必要であるならば対象の個別に合わせた適切な具体的方法を、各専門領域で検討する必要があると考える。

基礎看護演習項目のうち、経管栄養法、注射、点滴、吸引、吸入、導尿、採血の項目では、「充分役立っている」がいる一方「内容が不足している」も多く、意見が分かれていた。基礎看護演習では、どの領域でも共通する一般的な原理と方法を教授している。しかし、実践では、対象の特性や状況といった個別性に応じた技術が求められる。実践能力育成のため、技術の根拠となる知識や対象の理解等と、技術との統合について検討する必要があることが示唆された。

基礎看護演習と成人看護演習の中で、包帯法と胃管挿入は、半数以上が「実践する機会がない」とした。演習時間に限度があることから、どの領域でもほとんど現場で使用しない項目については、

実践能力としての重要性を判断し、内容の削減や、教育内容の検討が必要であることが示唆された。在宅看護、小児看護、母性看護領域の演習項目に対する評価では「実践の機会がない」が多かった。これは、これらの領域での従事経験者が少数であったからと考えられる。しかし、その領域で従事していても経験することのない演習項目については、項目として取り上げるのか、またその内容について検討する必要があると考える。また、本学は、短期大学とは異なり、すべて保健師・看護師合同カリキュラムとなっている。それをふまえた到達目標の設定や教育内容の検討が必要である。

病院看護職員の需給状況調査<sup>12)</sup>によると、採用したい看護職員の条件として、実践能力のある看護師と答えた施設が約9割であった。卒業生が多く就職する病院は、実践能力を強く求めている。しかし、看護基礎教育では、限られた期間や状況の中で、教育できる技術の内容や経験に限界がある。今後は、就職する施設と大学と情報交換を行い、学内での看護技術教育と卒後の看護技術教育が一貫するように、双方が一緒に検討する必要があると考える。

本研究では、看護実践能力育成に向けての教育の評価を、看護技術演習の項目に着目し、調査を行った。看護技術は、単にテクニクの動作ではなく、認知領域、情意領域、精神運動領域を含み、いくつかの連動した動作で、個別性に対応するものと考えられている<sup>13)</sup>。本調査の設問が演習項目であったため、対象者からはテクニクの精神運動領域にのみ解釈されたかもしれない。今後は、看護技術の構成要素である認知領域や情意領域に対する評価についても検討していきたい。

大学教育の自己点検評価は、教育の質の維持向上のために必須であり、本学でも実施している。しかし、卒業後の学生からの評価は、ほとんど行われていない。看護学教育は、卒業後に社会で看護職者としての役割を果たすことを前提として行われていることから、卒業生の実際の活動を確し、その実態を教育課程と教育の過程に生かす必要がある<sup>13)</sup>。実践の場で看護を実践している卒業生からは、実践能力に必要となる具体的な評価が期待できる。今後、卒業後も含め、縦断的に教育の評価を行い、実践能力を育成するため具体的に教育内容を検討していきたい。

## おわりに

山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生を対象に、卒業後の実態と在学中の看護技術演習に対する評価を実施した。卒業生の約半数が、今後何らかの資格を取得したいと考えていた。在学中の看護技術演習に対して、概ね肯定的な評価であったものの、内容の不足、実践の場で実施されている方法が異なる、演習で取り上げている項目は実践で実施する機会がない等の課題が明らかとなった。本調査の結果をもとに、本学の特色の検討と、看護技術に関する教育方法を検討していきたい。

本調査にご回答いただいた卒業生の皆様と、ご協力いただいた本学教務学生課に深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会報告：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて，2002
- 2) 望月美知代，永野光子：看護系大学自己点検・評価のための測定用具 看護系大学授業過程評価スケール<看護技術演習用>，Quality Nursing，5, 362-368, 1999
- 3) 佐藤みつ子，宇佐美千恵子，青木康子，平野朝久：看護教育における授業設計 指導案作成の実際，医学書院，1993
- 4) 看護問題研究会監修：平成14年看護関係統計資料集，日本看護協会出版会，2003
- 5) 日本看護協会ホームページ <http://www.nurse.or.jp>
- 6) 高梨一彦，三浦秀春，山内久子他：弘前大学医療短期大学部看護学科卒業生の追跡調査(1) 調査の目的と方法および卒業生の現状について，弘前医療短期大学紀要，23, 1-5, 1999
- 7) 市江和子，園井葉子，羽場俊秀他：日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査(その1) 就業状況・職業意識を中心に，日本赤十字愛知短期大学紀要，12, 83-92, 2000
- 8) 山形県健康福祉部保健業務課：山形県看護職員需給見通し，平成12年
- 9) 厚生労働省「身体拘束ゼロ作戦推進会議」：身体拘束ゼロへの手引き 高齢者ケアに関わるすべての人に，2001
- 10) 岡崎美智子編著：基礎看護技術 その手順と根拠 第2版，医学書院，1998
- 11) 氏家幸子：基礎看護技術 第5版，医学書院，2000
- 12) 日本看護協会編：平成14年度看護白書，日本看護協会出版会，2002
- 13) 田島桂子：看護実践能力育成に向けた教育の基礎，医学書院，2002

2003.10.31 受稿，2004.1.5 受理

## 要 約

背景：実践能力を高める看護基礎教育が求められている。

目的：山形県立保健医療短期大学の卒業生の動向と、学内で学習した演習内容の評価を明らかにする。

方法：対象は山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生238人。自記式質問紙法，郵送により調査用紙を配布回収した。調査内容は、卒業後の進路，就業状況，今後得たい資格，演習に対する評価であった。

結果：103人から回答を得た。卒業後これまで取得した資格は，保健師，助産師，養護教諭，学士であった。就業しているものは，看護師の他，保健師，助産師，養護教諭として働いていた。51人が今後他の資格取得を希望し，学士，保健師，養護教諭，ケアマネージャー，認定看護師などであった。学内で行った演習は，卒業後の実践に充分役立っている内容がある一方，内容不足，実践とかけ離れている，実践する機会がない内容もあった。

考察：実践能力の強化には，演習項目や内容を検討する必要がある。

キーワード：看護教育，演習，卒業生